

<3ページからつづきます>

考えて見れば不思議ですよ。お話ししてきたとおり、バプテストは一人ひとりが自分なりに聖書を読んで、自分なりの信仰理解を持って良いのですから、「だったら自分一人で聖書を読めばいいじゃないか」ですよ。けれども実際には最初のバプテストたちは、迫害されて危険な中で、それでも集まって聖書を読み続けました。確かに私たちは各自が主体的に聖書から信仰理解を深めることが赦されているけれども、実のところ「聖書に聞く」と言っただけ、こんな時にはどうすることが正しいのか、神さまのみ心はどこにあるのか、その直接的な答えが聖書の中に見つかることは稀なのです。それどころか聖書には、一つの事柄について、私たちの目には矛盾に思えるような両論さえある。そこでさらに懸命に聖書を読み、祈り、自分なりの確信を深めていくわけですが、当然一人の人間の読み方には限界があります。だから、そこで満足して終わるのではなくて、それが本当に聖霊の導きによってもたらされた

ものかを確認しあうために常に集まって、他の人の読み方も聞きながら、真に主が言われようとしているものを共に求めていく。つまり共に「神学すること」ですね。まさにバプテストのアイデンティティ、それを大事にしたのだと思うのです。そのことを私たちは引き継いできているのですから、まずそれを意識して丁寧に始めるだけでも、教会が「神学する力」を養う第一歩になるでしょう。だから万が一皆さんの教会学校が、共に聖書から聴き合うと言いつつ、その実リーダーの聖書解釈を聴くだけで終わっていたり、各々が自分の読み方を披瀝し合うけれど、「あなたはあなたで好きに信じてください」と、違いが違いのままどこまでも平行線をたどって出会うことがないとしたら、目的から考えると、それはやっぱり見直していくべきなのだろうと思います。

注1: この原稿は2015年1月24日開催「きたかん壮年会研修会」での講演記録を大幅に加筆・修正したものです。

伝道者養成 & 教会形成

全国壮年会連合 NEWS

第88号
2015年10月23日
発行

日本バプテスト連盟
全国壮年会連合
発行人: 大城戸一彦
編集人: 井伊肇
Topics password▶ sorengo

神学校献金(神学生奨学金献金)

郵便振替 00150-7-669605 日本バプテスト連盟 全国壮年会連合事務局



信徒運動としての奨学金推進

西南学院大学神学部長 須藤伊知郎

いつも神学生たちのことを覚え、尊いお祈りと捧げ物で支援をしてくださり、心より感謝申し上げます。伝道者養成のために神学生奨学金制度を全国壮年会連合が推進してくださっているということは、本当に有り難いことです。これは実は日本のキリスト教界において非常にユニークなことなのです。私は仕事柄、学会や研究会に出かけて他教派の牧師や神学者と雑談することがあります。そんな時、伝道者養成について話し合うこともあります。そこで、奨学金に話が及ぶこともあるので、バプテスト連盟では信徒の組織である全国壮年会連合が神学生たちの奨学金制度を運営し、推進していると話すと、大変驚かれます。「へえ、それは珍しい。」「すごいね、うらやましい。」「うちの教派もそういうのがあればいいのに。」といった反応が帰ってきます。どこの教派もだいたい神学校の後援会に献金を集めるという形が一般的なようですが、信徒が基本的にボランティアで全国組織で神学生のために奨学金制度を運営するというのは他にはないやり方です。

全国壮年会連合が奨学金制度の運営を担うという決議をした2000年の岐阜の大会のことを今でもよく覚えています。連盟が機構改革を行わなければならない状況で、奨学金制度の運営をどうするか困っていた時、壮年たちが立ち上がり、信徒運動として、協力伝道の業として、そして自分たちの献身のかたちとして伝道者養成の重要な一端を担う、という決断をしたのでした。総会では非常に熱い議論が戦わされました。私もこの岐阜の大会では聖書講話を担当させていただき、「マタイ福音書の教会論」というテーマでマタイによる福音書を生

み出した教会の共同体論についてお話ししました。ポイントは、「兄弟姉妹」(マタイ23:8)の「赦され」(18:21-22, 35)で、「天の父の意志を行なう」(7:21; 12:50)交わりということです。マタイの教会には教師がいましたが、本当の教師はただ一人キリストのみで、キリストの前に立つと皆同じ弟子であって、平等な兄弟姉妹の共同体なのです。18章のいわゆる「教会規則」の説教を見れば分かるように、マタイの教会には執事、あるいは長老、監督といった役職はまだなく、そこではイエスを信じる小さな者たちが大切にされ(18:6, 10, 14)、教会総会が最終決定機関である会衆主義が採られていました(18:17)。マタイの共同体は、主を告白し、神の意志である義を実践しようとする自立的な信徒の教会だったので、我田引水になるかもしれませんが、実はこれは大変バプテスト的です。(この点の指摘が岐阜の大会でお話しした際には一番うけました)。教会が次の世代を担う伝道者を養成するために、自覚的な信徒の一人一人が立ち上がって行動するというのは、とても自然なことなのです。その意味で、神学生奨学金を推進し運営する活動は、初代教会に倣うバプテストに相応しい信徒運動であると言えます。

これからも全国の壮年のみなさん一人お一人が、ご自分の献身のかたちとして伝道者養成を担う、神学校献金(神学生奨学金献金)推進の運動を進めて下さることを切にお願いいたします。そしてこの信徒運動を展開される全国諸教会・伝道所の壮年会活動の上に、主の豊かな恵みと祝福がありますようにお祈り申し上げます。

2015年度全国壮年会連合総会 【審議報告】 開催日: 2015年8月21日 (金)

| | |
|-------|-------------------------------------|
| 議案1~8 | 2014年度各活動報告及び決算、2015年度活動計画及び予算 <承認> |
| 議案9 | 2016・2017年度役員選挙 <承認> |
| 議案14 | 規則改定委員選任 <承認> |
| 議案15 | 2016年度総会議長選任 <承認> |
| 議案16 | 第52回(2017年度)全国壮年大会実行委員 <承認> |

- 上記以外の議案は<否決>または<取り下げ>
- 詳細は参加者及び各教会に送付した「第50回(2015年度)総会報告」をご参照ください。

◆南九州地方連合壮年会〔鹿児島ブロック〕神学校週間取組み 写真



日本バプテスト連盟全国壮年会連合 〒336-0017 さいたま市南区南浦和1-2-4
事務局執務時間: 月、水、金 10:00 ~ 16:00
☎・fax: 048-886-7533 http://www.sonen.net sonen@bapren.jp

一神学生 証し

九州バプテスト神学校 牧師コース2年 尹 正鉉 (ユン・ジョンヒョン、博多キリスト教会)



主の御名を賛美申し上げます。いつも私たち神学生を祈りに覚えて支えていただいておりますことを心より感謝致します。

私は韓国のソウルにあるバプテスト教会の宣教師として派遣されて日本にまいりました。神様の種まきがあったからこそ、私が日本に来ることができたのだと思います。約70年前、私の父の兄は、来日して日本人の女性と結婚しました。父の兄の家族から送られた日本語の手紙を読んでくれた父に家族史を聞かしてもらいました。それを機に私は、日本という国に関心が与えられいつか神様が私を、日本に遣わしてくだされば宣教師になりたいとの祈りに導かれました。その後大学生になって九州地方での路傍伝道活動に参加したり日本のリバイバルのための祈禱会に出て祈ったりしてきました。そして16年が過ぎて、2011年、宣教師として日本の地を踏むことになりました。

日本語と文化の壁の高さを実感した最初の2年を過ごす中で、私の中で次第に韓国から持ってきた日本宣教に対する考え方や計画をすべて放棄することになりました。このような限界を実感していた時に、九州バプテ

スト神学校への進学という新たな扉が開かれました。「ゼロから始めよう」という覚悟で神学校に入学しました。

神学校での学びは、とても楽しいです。聖書を学び、これを生かして教会に仕える情熱を持っている方々と付き合いながら、たくさん教わっており刺激を受けています。何よりも牧師先生の講義を通して神様のことをより深く知り、また同じ心で日本の教会の信仰を共有することができて感謝しています。

今年7月からは、6ヶ月間、教会研修生として和白バプテスト教会でお世話になっています。役員会や各委員会等に陪席させて頂いたりしながら、ただ頭で理解するのではなく、体で実感しています。韓国教会に慣れている私にとっては、日本の教会の牧会現場の中に入って、貴重な経験を重ねるよき学びのときとなっています。

卒業は、来年の春に予定されています。これで学びは終わりではなく、献身者として新たな学びの開始だと思えます。キリストの体なる教会と信徒さんと共におり、主に励まされて一つになる道を歩いていきたいと思えます。全国の教会の皆さん、神学生たちが神のご意志にふさわしい神学生として、献身者として立てられるよう続けてお祈りをお願い申し上げます。

南九州地方連合壮年会〔鹿児島ブロック〕神学校週間取組みについて（鹿児島ブロック世話役・美園）

主の御名を賛美します。

各教会壮年会におかれましては、伝道者養成のために神学校週間（神学校献金）活動に、積極的にお取り組みのことと存じ上げます。

さて、南九州地方連合〔鹿児島ブロック〕では、2014年度のブロック壮年メンバーミーティングにおいて、神学校週間（神学校奨学金）取組みの強化を目的に、これまでの活動を継続するとともに、下記の事項を新たに実施することとしました。

- ①神学校週間（神学校献金）アピールは、全国の壮年メンバーによる取組みであることを表すためと相互交流のために、各教会の壮年メンバーがブロック内の他教会に出向いて行う。
- ②各教会の壮年会会長は、神学校週間前に教会役員会等で、神学校アピールのために他教会メンバーが訪問することについて了解していただくとともに、当日の礼拝メッセージにおいて伝道者養成について言及していただくように要請する。

この取組事項にもとづき、2015年度においても7月5日(主日)に相互訪問を実施し下記の報告が寄せられました。

○A教会～『今週はバプテスト連盟の神学校週間ということでブロック壮年会による相互交換アピールを礼拝で行いました(^)。今の時代、本当に福音の証し人が多く興されて欲しいと思います。』

○B教会～『7月5日の当教会の主日礼拝にD教会壮年会のM兄・T兄・I兄がおいで下さり、神学校週間と神学校献金について説明とアピールの奉仕をして下さいました。色々な話をして頂き、当教会が大変力づけられたことを感謝しています。』

○C教会～『神学校献金のアピールにE教会のSさんが来て下さいました。神学校週間での集中した働きも大切だが、毎週や毎月の継続的な献金をするのも大事だ、と訴えられました。』

今後、2015年度末に向けて、各教会で設定した神学校献金目標の達成に向けて、壮年メンバーが活動していきます。（なお、世話役が所属する伊集院キリスト教会では、第5主日のランチサービスを壮年会担当として、その益金を神学校献金にあてています。）

来年度については新しいリーダーが選出されることとなりますが、伝道者養成に向けた神学校献金取組み強化のために、どのような活動がさらに必要かを検討していくこととなります。<取り組みの写真は4ページに掲載しています>



「バプテストにおける伝道者養成」その3 (注1)

日本バプテスト連盟宣教研究所非常勤所員・恵泉バプテスト教会協力牧師 松見享子

ところで「神学する」ことは、人間を超えた神について考えることですから、どれほど著名な神学者や経験豊富な牧師の聖書の読み方、信仰理解でも、「ある時、ある状況の中で」という限界を持っています。個々の信じ方も同じで、自分では「これこそが神のみ心だ」と思っても、実は自分勝手な思い込みや理解だということもあるのです。だからこそバプテストは、人間が作る「教理」や権威者のもとで画一化される教会のあり方を否定したのでしょう。しかし一方で、長い間の積み上げや歴史の吟味にさらされた「教理」というモノサシが無い分、「何でもあり」にもなりやすく、バプテストの信仰とは必ずしも一致しないその時流行の神学思想に影響を受けたり、教会の外（例えば一般企業など）の価値観を無批判に持ち込んだり、信仰の主観化、つまり自分（自分たちの教会）の信じ方が絶対なのだとしてしまう危険性も、私たちバプテストのやり方には常につきまっています。

この課題を克服して、神さまがその時々私たちに求めておられること、語りかけてくださっていることをできるだけ正しく聞き取るためには、まずは各自が先入観や偏見や権威から押し付けられた読み方から自由にされて聖書に向き合い続け、聖書から自分ならではの答えを聴き取り続けることが欠かせません。その上でそれを持ち寄って集まり、互いの思いや考えを聞き合い吟味し合い続けること、つまり、共に「神学し続ける」ことが必要です。ところがお互いが真剣だからこそ、これはしんどいし手間のかかる仕事ですね。何かの権威を持ちだして「正解」としたり、自分の思いだけを押し通したり、論争を避けるために相手の意見に合わせたり、そもそも意見の違う相手とは関係を持たなければ、その方がずっと楽でしょう。それでも、どんなに違いはあっても、イエス・キリストの福音というただ一つの一致点ゆえに、私たちは苦勞しながらも共に生きるための道を模索し続けます。それは、がむしゃらに話し合いを続ければ結論が出るということでも、人間の知恵でもって合意を目指すということでもありません。さらに、そうやって得られた結論でさえ絶対に正解というわけではなく、絶えずみ言葉によって検証され、もしも誤りだと気づいたら、いつでもそれを修正したり、撤回することができるという柔軟で謙遜な姿勢ですね。そのような姿勢を持ち続けることも必要です。そして、そうした限界を知った上で、私たちはある時には「今は、自分たちの全てをかけてこう信じるのだ」と告白します。

バプテストの牧師の大きな役割は、その、つい避

けてしまいがちなしんどいプロセスにこそ、主にある喜びがあることを確信して、職務として教会をそのことへと整える働きです。そのためにはまず牧師自身が「神学し続ける」ことに開かれていなければならないし、そのことは冒頭にお話しした「バプテスト理解、献身理解、コミュニケーション」の課題ともつながっているのです。実際には、新任研の参加者が何の考えも持っていないわけではなく、もちろんそれぞれの考えがあります。でも間違ふことへの恐れなのか、それを議論の場では出さなかったり、逆に自分の意見は主張するけれど、他の意見を聞いても「いや、私はこうですから」と退けて対話にならない。そんな両極端な反応が見られます。そのどちらもが「神学する」ということに含まれる二つの要素、つまり聖書から聞き、自分なりの信仰理解を深めていくこと、なおかつ、それを絶対化せず、に他者と分かち合って自己吟味するということを満たしていないという点では共通しています。

「伝道者の課題は、その伝道者を育てる教会自身の課題でもある」とお話ししました。「バプテスト理解、献身理解、コミュニケーション」を問われる伝道者が増えているなら、教会もまたそれについて問われるでしょう。伝道者の「神学する力、神学し続ける力」が弱まっているなら、その伝道者を育てる教会の「神学する力、神学し続ける力」についてもまた問われるでしょう。もしも私たちが牧師研修の場で感じているように、本当に「神学する力、神学し続ける力」を身につけることが、今の伝道者養成における最重要の課題だとするならば、神学校や特別な現場経験だけが教育訓練の場ではなくて、出身教会や赴任教会も含む全ての教会が取り組むことができるし、取り組まなければならない課題なのです。

では、実際にはどうすればいいのか。「神学する」と聞いても、「えっ？」と感じると思うのですね。「難しそう」とか「それは牧師がやることでしょ？」とか。しかし、ひとたび意識するなら、教会内外での事柄すべてが「神学する」ための得難い機会であることに気づきます。例えば本当に基本ですけれども、共に聖書から聴き合うこと、お互いの言葉に聴き合うこと。教会の礼拝でみ言葉を聴くことはもちろんですが、教会学校などで他の人と一緒に聖書を読むということを多くの教会でされていると思います。 <4ページにつづきます>